

1 報告内容の概要

(1) はじめに

筆者は、聴覚障害児童への言語運用力育成において、「PISA 型読解力」及び「B 問題」の視点からアプローチを行った。子ども達の知識の活用力をみる「B 問題」においてつまづきが多い傾向にあり、これは知識の運用、言語の運用の難しさを示していると考えられる。このことを解決するため、2003 年の PISA 調査で定義された PISA 型読解力の観点「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する」が注目されており、「考える力」「活用力」の育成を目指すとしている（武田,2014）。このことから、聴覚障害児の個々の実態を考慮しながら、PISA 型読解力や B 問題の視点を生かした学習支援を行うことで、言語運用の力を伸ばせると考えた。

また筆者は、児童同士のやり取りを通しての言語運用力の向上を図った。実際に児童同士の集団の中でのコミュニケーションでは、やり取りには意欲的ではあるものの、様々な要因でトラブルになる傾向がある。ただ、そういったトラブルを糧にして、教師の支援や児童自身の意識の向上により、関わり方が改善されることが多いことも事実であり、どう関わり方が成長し、やり取りが向上したか、2年半の実践を行った。

以上の実践に共通することに「小集団でのやり取り」が挙げられる。文部科学省の特別支援教育の在り方に関する特別委員会の資料（文部科学省,2011）では、聴覚障害に関する学校における配慮について、「自由な会話のできる場、自由なコミュニケーションを通して学習できる集団の保障」を挙げていることから、集団の確保の重要性が示されている。そこで、児童同士の相互作用や影響について、集団の中の個人に焦点を当てそこでの情動・認知・態度・思考・行動を理解し説明する「グループダイナミクス」の観点から、3つの実践について振り返っていきいたい。

（中略）

2 報告を振り返って

以上の3つの実践では、小集団を形成し、話し合いながら課題を解決していくことが主な活動になった。実際の実践では2～5名という小集団で実施しており、小学校のような大きな集団とは違い、互いに関わり合い、話し合いやすい、考えを深めやすい環境にあると言える。そのため、話し合いの中で、互いの考えのフィードバックや価値観の共有が促進され、伝え合うための言語運用力も向上されたと考えられる。益谷（2015）も「小集団による学習の経験は初等教育の段階からでも採り入れ、競争原理や個人主義・集団主義ではなく、自他共栄の協同原理や確立した自己を形成していく必要性がある」と述べており、小集団での学習の必要性について指摘している。3つの実践では小集団におけるやり取りの中から互いに向上する結果も見られたが、そこに至るためには「生産性のある集団」づくりに導く必要があり、それを担う指導者の役割は欠かせないと思われる。指導者には児童個々の様々な実態（言語面・生活面・性格面など）や集団の特性（児童相互の関係性（仲の良い児童や悪い児童, 児童同士の上下関係の傾向）やリーダーシップのある児童への働き掛けなど）を把握しながら、より生産性を高められるような集団に導く役割が求められると考えられる。小集団の特性を生かしながら、聴覚障害児の人間形成、そして言語運用力の形成を目指すことが、これからの聾学校の使命ではないかと考えられる。